



Title	子どもの語用能力評価法の開発：ことばのつかいかたテストの信頼性・妥当性の検証，判別性能及び語用能力の認知能力との関連の検討
Author(s)	水谷，柳子
Citation	大阪大学，2022，博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/88184">https://hdl.handle.net/11094/88184</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"&gt;大阪大学の博士論文について</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏名 ( 水谷 柳子 )

## 論文題名

子どもの語用能力評価法の開発：ことばのつかいかたテストの信頼性・妥当性の検証、判別性能及び語用能力の認知能力との関連の検討

## 論文内容の要旨

【背景・目的】自閉症スペクトラム障害 (ASD) 児者は、言語の社会的使用の障害(大井,2006)を示すことはよく知られている。語用障害は構造化された面接場面では問題点が把握しにくい。現在、日本語の語用能力の発達を評価する標準化されている検査は、質問紙法の「子どものコミュニケーション・チェックリスト CCC-2 日本語版」が唯一であり、語用遂行能力直接検査においてはいくつかの試みが散見されるだけである。そこで本研究では、臨床場面で負担なく取り組める語用評価法開発を目的とし、オンライン語用論課題「ことばのつかいかたテスト」The Test of Pragmatics of Japanese for Children(以下TOPJC)を作成し、テストの信頼性と妥当性の検証、判別性能及び語用能力の認知能力との関連の検討を行うこととした。

【方法】対象はASDの未就学児・小中学生と、対照群として定型の未就学児・小中学生、その養育者とした。金沢大学ASD児研究バンビプランよりASD児46名 (平均7.7歳,SD2.56)が参加、TD児は3群より募集しA群:バンビプラン35名,B群:石川県内1幼稚園より39名,C群:調査会社アンケートモニターより101名の計175名 (平均7.65歳,SD2.50)であった。養育者群はC群養育者100名 (すべて女性平均40.88歳,SD4.57)である。取得データ〈TOPJC:全員,CCC-2:全員,PVT-R:ASD群とTD-A,B群, K-ABC認知総合尺度:ASD群とTD-A群,心の理論:TD-B群,Vineland-II:ASD群とTD-A群の一部〉。TOPJCは比喩・皮肉・間接依頼・丁寧さの調節・その他の5下位領域27問のテストであり、字幕付き音声動画で呈示される課題に対し3ないし5つの選択肢から1つを選んで回答する。

【結果・考察】TOPJC因子数の検討において、成人養育者正答率80%以下の2課題を除外し25項目とし、内容的に「子どもの語用」というひとつの概念を測定するものと考え方が妥当であると判断したため、1因子解を採用した。探索的因子分析(最尤法)の結果、25項目中24項目が.35以上で1因子解であることに矛盾は生じなかった。信頼性分析において $\alpha$ 係数.94、 $\omega$ 係数.94であり高い内的整合性を示した。TD児と養育者のTOPJC総正答数の分布比較において、TD児の語用能力は5歳頃から上昇し続けること、TD児は11歳頃には成人養育者とほぼそん色ないレベルにまで達していることが示唆された。妥当性の検討において、両群のTOPJC総正答数と下位項目得点の比較で、ASD群はTD群よりも有意に点数が低く、弁別的妥当性が示唆された。TOPJCはCCC-2のGCCおよびVABS2のコミュニケーション領域との間に、有意な正の相関が示され、併存的妥当性が支持されたと考えらる。ロジスティック回帰分析を行いCCC-2のGCCとTOPJC総正答数ともに有意にASD児とTD児とを判別できることが確認された。またこの2変数を組み合わせたロジスティック回帰分析による分類の結果、判別の中率は89.8%であった。TOPJC総正答数と月齢との関連の検討で、相関分析の結果両群ともにTOPJCと月齢は有意な相関が認められ、共分散分析の結果、月齢を共変量とする分析でASD群とTD群との間に有意な差が確認され、ASD児の語用能力は年齢と共に増すが、TD児に比べてその発達が遅れることが示唆された。語用能力と認知能力の関連を検討するため、まずK-ABC認知総合尺度80以上で統制した両群について比較したところ、総正答及び丁寧さ、間接依頼、その他の各正答数に有意差が認められた (マンホイットニーU検定)。また相関分析の結果ASD群のみにTOPJC総正答数とK-ABC認知総合尺度、TOPJC皮肉とPVT-R評価点に有意な相関が認められ、このことによりTD児が自然に語用能力を会得していくのに対し、ASD児は認知能力や語彙力など様々な能力で補完しながら会得している可能性が考えられる。幼稚園在園児のTOPJCと心の理論の相関分析の結果、間接依頼と比喩で有意な相関が得られ、語用能力の発達に心の理論が影響を与えていることが示唆された。

【結論】TOPJCは1因子解並びに高い内的整合性が示され、項目全体として子どもの語用というひとつの能力を測定している。弁別的妥当性と併存的妥当性が確認され、子どもの語用能力直接評価としての有効性が示唆された。TOPJCとCCC-2を組み合わせることで判別性能が向上し信頼性の高い情報を提供できることが示された。ASD児は語用能力について認知能力や語彙力など様々な能力で補完しながら会得している可能性が示唆された。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 水谷 柳子 )			
論文審査担当者	(職)	氏 名	
	主 査	教 授	谷池 雅子
	副 査	教 授	友田 明美
	副 査	准教授	吉村 優子

## 論文審査の結果の要旨

自閉スペクトラム症 (ASD) 児が社会的コミュニケーションに困難さを示すことはよく知られており、具体的には統語や意味論的な技能がどんなに高くても語用論的な技能はそれほど高くはないと報告されている。語用障害は自然なやり取りの中でよく生じ、構造化された臨床検査場面では問題点が明らかになりにくい。日本の語用能力発達評価法として標準化されているのは子どものコミュニケーションチェックリストCCC-2日本語版が唯一である。子どもの語用能力を間接的に把握するCCC-2に加えて、直接的な把握を行う遂行型検査を開発しバッテリーを組むことでより多角的な評価が可能となるが、日本の子どもの語用遂行能力直接検査は希少で、また臨床・研究用途には十分ではない。

そこで本研究では臨床場面で使用可能な語用評価法開発を目的とし、オンラインで提供されるアニメーション語用論課題である「ことばのつかいかたテスト」The Test of Pragmatics of Japanese for Children(以下TOPJC)を作成し、テストの信頼性と妥当性の検証、判別性能及び語用能力の認知能力との関連の検討を行った。

対象はASDの診断を持つ未就学児・小中学生46名と、定型の未就学児・小中学生175名、そしてその養育者100名である。TOPJCは比喻・皮肉・間接依頼・丁寧さの調節・その他の5下位領域からなる27問のテストであり、実施は約30分程度となる。養育者100名の正答率が80%を切った2課題を分析から除外し25項目を用いて因子分析を行った結果、1因子解であること並びに $\alpha$ 係数.94と高い内的整合性が示された。TD児のTOPJC総正答数の分布から、子どもの語用能力は5歳頃から上昇し続けること、また11歳頃には成人養育者とほぼ同色ないレベルにまで達していることが示唆された。妥当性の検討において、ASD・定型両群のTOPJC得点比較から弁別的妥当性が、またCCC-2とVineland-IIコミュニケーション領域得点を用いた相関分析から併存的妥当性が示唆された。TOPJCとGCCを用いたロジスティック回帰分析の結果判別の中率は89.8%であった。今後予定される標準化の際に評価点に基づいて再分析を行う必要があるものの、両テストは語用能力のアセスメントとして有効なバッテリーとなると期待される。両群のTOPJCと年齢を用いた分析からASD児の語用能力は年齢と共に増すが、TD児に比べてその発達が遅れることが示唆された。K-ABC認知総合尺度を統制してもASD児の語用能力がTD児と差があることから、ASD児の語用能力が劣るのは認知能力が劣るからではないこと、またTD児は語用能力を自然に会得していくがASD児は認知能力や語彙力など様々な能力で補完しながら会得していく可能性が示唆された。語用能力の認知能力との関連として、幼稚園TD児のTOPJCと心の理論の相関分析の結果から、語用能力の発達に心の理論が影響を与えていることが示唆された。今後研究が進めば語用障害を呈する子どものより効果的な支援・介入につながる知見を得られることが期待できる。

本研究の結果からTOPJCの語用能力アセスメントとしての可能性が示された。テスト実施の際に子どもの負担が少ないこと、また子どもの直接の反応を見られることは臨床現場で活かされるより詳しい情報提供となり、TOPJCの大きな強みである。また今まで手薄であった語用能力直接検査法が開発されることで、語用障害に関わる脳の神経学的基盤の解明につながる可能性が高まるなど、研究の可能性をも切り開いた。

よって本研究の成果は博士 (小児発達学) の学位授与に値すると判断した。